

2-2. ちゃぶ台囲んで膝詰め対話（サイエンスカフェ）

■ 2-2-1. 概要

日時 9月28日（日曜日）10時30分～12時00分／13時30分～15時00分

会場 京都大学百周年時計台記念館 2階 国際交流ホール

「ちゃぶ台囲んで膝詰め対話（サイエンスカフェ）」では、研究にまつわるあんな話、こんな話を、来場者と大学の研究者がお茶の間気分で話し合うコーナーです。会場には4つのちゃぶ台ブースが設置され、10時30分から12時の間に3つ、13時30分から15時の間に4つ、計7つの研究グループが出展しました。各研究グループは、どんな研究を行っているのか、なぜその研究をすることになったのか、などを来場者と語り合いました。3帖の畳から成るブースでは、ちゃぶ台を囲んだり、畳の縁に腰をかけたりと、思い思いのスタイルで研究者と対話をする来場者の姿が見られました。



〈来場者の声〉

- 子どもの疑問に（科学的であるかないかにせよ）ハナから向き合ってくれて、顔をつきあわせて一人前に扱ってくれてありがとう（40代）
- ツアーやちゃぶ台など、イベントが多かったのがよかった！

〈出展者の声〉

- ちゃぶ台の企画で参加させていただきましたが、スタッフの方が気を使ってお手伝いをして下さりとても助かりました。休憩時間を作って時間を区切っていたので、何人もの来場者の方とお話できました。
- ちゃぶ台は来訪者にとっていまいちコンセプトが分かりにくい。何のテーマで語るのか。のぼりでも示せばのぞきに行くのですが。

■ 2-2-2. 「ちゃぶ台囲んで膝詰め対話」出展一覧

日時	出展代表者氏名（所属 職名）	出展タイトル
9月28日 （日） 10時30分～ 12時00分	和田敬仁（京都大学大学院医学研究科 准教授）	「いのちのバトン —体験型ヒト遺伝教室—」
	西村周浩（京都大学白眉センター 特定助教）	「日本でヨーロッパについて語る？」
	村瀬雅俊（京都大学基礎物理学研究所 准教授）	「統合知 —新たな学問の創成に向けて—」
9月28日 （日） 13時30分～ 15時00分	平岡真寛（京都大学大学院医学研究科 教授） 原田浩（京都大学医学部附属病院 特定准教授）	「分子画像と四次元放射線治療の融合」
	ネイサン・パデノック（京都大学白眉センター／東南アジア研究所 特定准教授）	「言語から考える世界」
	寺村謙太郎（京都大学大学院工学研究科 准教授）	「CO ₂ を“ひかり”と“みず”でリサイクル!？」
	井上元（京都大学大学院工学研究科 助教）	「未来の“クルマ”とその“社会”」

「ちゃぶ台囲んで膝詰め対話」レポート

私の仕事内容は、① ちゃぶ台の輪に入り難そうなお客さんがいたら、さりげなく促す、② 研究者を独占している人がいたら、他の人も話せるようにしてあげる、③ 研究者が一方向的に話し続けていたら、よい感じの質問をして遮る、④ 5分間の休憩時間になったら「休憩中」の三角柱をちゃぶ台において、休憩を入れてもらう、の4つでした。

ちゃぶ台の形式は2つに分類することができました。ひとつは、(i) 学生などスタッフが多く、お客さん一人に対して研究者一人が対応するタイプ（平岡先生、寺村先生）、もうひとつは、(ii) 研究者が1人あるいは2人で、お客さん3～5人に対して研究者一人が対応するタイプ（和田先生・パデノック先生・西村先生・村瀬先生・井上先生）です。

この2つの形式における、①-④の仕事について、実行した内容・反省・コメントを以下に挙げます。

(i)について、① 研究者に声をかけることをためらう方が多く見られたので、背中を押すことはできたと思います。② 独占してしまう人は時々見られました。しかし、他にも研究者が多いので他の人が話せないという問題は起きることはなかったです。研究者側が少し困っている様子でしたが、そこを遮ることはしませんでした。③ 4ブースを見ているので、ずっと話に入ることはできず、遮ることはできませんでした。ポスターよりもゆっくり聞けるということもちゃぶ台のメリットだと思うので、あまり問題ではないと思います。また研究者側もひと通り話すネタは用意されていたのがよかったです。④ この形式に対しては、休憩時間の声掛けは行いませんでした。大体20-30分ほどで入れ替わりがあったので、問題はなかったと思います。

(ii)について、① 一度輪になって5-10分経ってしまったところには入らない方がいいと思いました。入ったとしても話についていけないです。ただ、30分毎の休憩を区切りにし、お客さんを呼び寄せる・始まったばかりのところに場所を作って入れるなどができました。② 研究者を独占する人はいなかったと思います。③ (i)と同様、遮ることはできませんでした。この形式だと、研究者が話しつづけるのは仕方がないことだ

と思います。聞いているうちにお客さんも慣れて、どんどん質問しているのが見られました。④ さりげなく休憩の三角柱を置いても効果はありません。そのままにしておくと、会話がいつまでも続くので、声をかけて入れ替わってもらいました。ブースに30分の時間区切りが明記してあったので、それに合わせて時間を調整して来るお客さんがいました。ただ、13:30 スタートのところをすこし早めてスタートしたため時間がずれ、入れ替え時間があいまいになってしまいました。お客さんに次が何時から始まるか伝えたいときに困りました。

研究者側と事前にどちらの形式で、どのようにサポートしたらいいか話し合っておくべきでした。話があまりにも長い時には、ひと区切りつけることを強制することも必要だと感じました。特に(ii)の場合は、研究者の人数が少なく、話すことに集中してしまうので、こちら側から区切り時間への積極的な介入と研究者側の時間意識が大事だと思いました。

(秋柴美沙穂)